



国立大学法人

長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY

長崎大学
ダイバーシティ推進センター

〒852-8521 長崎市文教町1-14
TEL.095-819-2889 FAX.095-819-2159
<https://www.cdi.nagasaki-u.ac.jp>



羽
ば
た
く
時
代
へ
—

Women
Role
Models

長崎大学 女性研究者
ロールモデルV

国立大学法人

長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY

グローバルに活躍する 女性研究者からのメッセージ

『長崎大学女性研究者 ロールモデル V』をみなさんにお届けします。長崎大学ダイバーシティ推進センターでは、これまで、長崎大学に所属する、あるいはゆかりのある女性研究者を取り上げてロールモデル集でご紹介してきました。今回のテーマは、長崎大学の女性研究者の海外における研究活動です。

長崎大学では、2019年に文部科学省「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）」に採択され、包括的な女性研究者サポートの取組のために“女性研究者サポートオフィス”を設置し、主に海外派遣支援制度、英語論文の作成支援等を進めています。今回のロールモデル集は、事業の取組の一環として、長崎大学の女

性研究者が、それぞれのかたちで海外とつながり、自分を磨き、研究を深め広げていく姿やみなさんへのメッセージをご紹介します。長期にわたる留学、

長期・短期の共同研究もあり、また訪れた地域や国もさまざまです。

グローバルに活躍する素晴らしい女性研究者が、こんなにたくさんいらっしゃいます。そして一人ひとりの「やってみたいこと」「仕事にしたいこと」を実現しています。そのメッセージを受け取り、活躍する姿をモデルのひとつにして皆さん自身

のキャリアをひろげるきっかけとください。長崎大学ダイバーシティ推進センターは、女性研究者と、それに続く女子中学生、高校生、学生、院生など、皆さんの「こうなりたい」を応援しています。



ダイバーシティ推進センター長
吉田ゆり
教授

Contents

1	留学中にコロナ禍にみまわれる「ロックダウンって何?」	黒田裕美 教授	2
2	自分の目で見ると、空気感を感じる経験なら短期間でも可能	源城かほり 准教授	4
3	人生はなりゆき、その場その場でベストを尽くす	五島聖子 教授	6
4	海の上での共同生活は会話で「共通点」を探し出す	近藤能子 准教授	8
5	新たな出会いから次の研究ステージが見えてくる	細田尚美 准教授	10
6	留学しない理由を探すよりも勇気を出して飛び込んで	山本和子 助教	12
7	研究留学で師事したボスと共同研究をする関係へ	南保明日香 教授	14
8	文化や背景の違う研究者との共同研究が世界のスタンダード	モイ メン リン 教授	16
9	エネルギーをもらえるけれどこちらもエネルギーがいるニューヨーク	山吉麻子 教授	18
座談会	外に出ることで得られるものとは?	門脇知子 教授 中島ゆり 准教授 榎 景子 准教授 角 美佐 教授 賽漢卓娜 准教授 松村琢磨	20

取材・編集
デザイン
カメラ
川良真理
三浦秀樹
松村琢磨

Women Role Models



留学中にコロナ禍にみまわれる 「ロックダウンって何?」



No.

1

Women
Role
Models

黒田裕美 教授

生命医科学域
(保健学系)

九州大学大学院医学系学府保健学専攻修了。博士(看護学)取得。2019年~20年米国ニュージャージー州ニューアークRutgers University School of Nursing留学。2009年より長崎大学着任。2016~18年日本赤十字九州国際看護大学助教を経て、再び2018年長崎大学へ。2020年より現職。

1年間の留学がコロナで 急遽短縮することに

医学部保健学科で基礎看護学を主に教えている黒田裕美教授は、2019年9月から1年間の予定でアメリカ・ニューアークのラトガース大学に留学しました。帰国は3カ月前倒し。そう、コロナ禍に見舞われ、泣く泣くの決断でした。

「ニューアークはニュージャージー州ですがマンハッタンまで20キロ、ほぼニューヨークの隣です。そこを選んだのは、私の研究テーマであるダウン症者の睡眠時無呼吸や看護学教育についての先進的な研究をラトガース大学でやっていたことと、公共交通が発達していて車がなくても生活しやすかったからです。ただ、ニューヨークから近いだけに、ニューアークでも3月20日すぎにはロックダウンされ、大学も閉鎖、寮住まいの学生は全員帰宅か帰国、あるいは大学寮以外に移れと。幸い私が住んでいたのは家族向けのメゾネットだったため留学を継続できました。当初『は?ロックダウンって何?』という驚きの連続でした」。

今となってはある意味貴重な体験でしたね。

「そもそも留学先では常に自分で情報を集めて自分で判断とい

う日々でしたから、COVID-19の状況についても、ネットのニュースやニューヨークの病院で働く看護師の友人からの情報を集めていました。それで、これはただ事ではないなと、事前に準備できたので助かりました。8月まで滞在すればまた研究活動が再開できるかもしれないと迷いましたが、帰国はタイミングも大切。6月に成田の便が再開するというニュースで決断しました」。

「It's up to you」 それはあなた次第

COVID-19の騒動が起きるまでは、充実した留学生活を送ることができたのでしょうか。

「はい。特に印象的だった言葉は『It's up to you——それはあなた次第ですよ』常に言われていましたね。最初のころは遠慮がちに、こういうことはできるのでしょうか?と聞いていました。お邪魔している立場ですし迷

惑かけちゃ申し訳ない。すると必ずこう返されます。つまり、できるかどうかより『私はこれをやりたいんだ』とはっきり意志を伝えることが大切なんですね。アメリカでの看護実践の現場を見たい、障害児支援の研究をしている研究者に会いたい、生活に不自由な程度の英会話を身に付けたい。すると人を紹介してくれたり情報を教えてくれたりして次のアクションが起きます。限られた時間しかありませんから、目的やゴールを明確にして合理的に動くことを教わりました」。

渡航ビザの取得から保険の手続きまですべて自分で交渉するのは時間がかかって大変だったけれど、自身の意識が能動的に変化して成長できた、それが一番の収穫、とも。

「次に行けるとなったら、今度はぬかりなく(笑) チャンスがあればぜひトライしたいです」。



「Dr.を持っているということで、大学の教員・研究者としていぶん大切にしてもらえました。ラトガース大学の先生がたとのネットワークができたのは収穫です」と黒田先生。写真はシミュレーション教育の現場にて。

KURODA Hiromi

自分の目で見る、空気感を感じる経験なら 短期間でも可能



No.

2

Women
Role
Models

源城かほり 准教授

総合生産科学域
(工学系)

東北大学大学院工学研究科博士後期3年の課程 都市・建築学専攻修了。博士(工学)取得。2009年、デンマーク・リンビーのデンマーク工科大学 室内環境・エネルギー国際センター(ICIEE)に1カ月留学。2015年より長崎大学に着任。同年より現職。

北欧のスローライフと EUの自由度を知る

海外留学というと長期の覚悟が必要だと思われていますが、まずは1カ月から始めてみるのも一つの方法です。源城かほり准教授のお話です。

「私は、前々職の時、教員海外研修プログラムに参加してデンマークに1カ月短期留学することができました。専門である居住環境の快適性についての研究で、先進的な教育プログラムを持つデンマーク工科大学を選びました。実際には研究メインというよりも授業を見たり教員や学生にインタビューしたりといった内容が主でしたが、研究のアクティビティが高く、ワークショップやセミナーへ参加することもできました。常にミニ国際会議的なイベントが開催されていたので、思いがけず著名な研究者と話をする機会もありました」。

充実していますね。めまぐるしい日々でした？

「ええ、でもリラックスした雰囲気の中で研究をしていて、スローライフなのに大きな研究成果を上げています。EU圏内では提携した大学同士であれば学費が無料ですし、単位互換制度が整備されていて留学がしやすくて半分为留学生。それ

を学生たちも『ベストミックス』と受け入れています。研究内容のプレゼンテーションで東北地方の木造住宅の室温データを見せると『どうしてそんなに低い温度で日本人は寝られるのか』と。北欧は24時間全館暖房が発達していて室温が高いため、室内にいる人は薄着で寝ます。日本では、寝る時は暖房を切ってふとんをかぶりますよね。そういう文化の違いに気づかされるなど、自分の研究を別の視点から検証することができました」。

旅と違い、拠点があれば フットワークも軽々

もともと海外旅行好きの源城先生、でも旅と住むのとはずいぶん違うという実感も。

「北欧は物価がすごく高くて住居費が予算オーバーに。そこで途中から自力で少し郊外の安い宿を借りたのですが、最初に

購入していた定期券のエリア外だったことがわかり罰金を払うはめに。知らなかったと言っても『分からないことは聞かないと教えてもらえない、聞かなかったのが悪い』と外国人でも客赦ない。あれは痛かったですね」。

滞在中はノルウェーやスウェーデンにも足を延ばしたそうです。

「観光地ではない、住宅地の普通の暮らしの様子を見ることができ、それは私の研究にはとても有益でした。今、子どもが小学生になり、これから長期で日本を離れるのは難しいと思います。もう少し小さい頃ならば、自由に動けたかも。若い世代の教員に言いたいのは、教員にとって、海外体験は短くても自分の研究を客観視するよい機会になるということ。日本を離れて、自分の研究が世界にも通用するのか一度考えてみること。お勧めですよ」。



デンマークといえば誰もが思い浮かぶ……アンデルセンの像前にて。「動ける時間が1週間だと無理にスケジュールを組みますが、1カ月なら少し余裕も出ます。とはいっても結局けっこう詰め込みましたね」。

GENJO Kahori



人生はなりゆき、 その場その場でベストを尽くす



No.

五島聖子 教授

総合生産科学域
(環境科学系)

1993年米国ハーバード大学M.L.A. Landscape Architecture, Graduate School of Design卒業。
1997年千葉大学大学院自然科学研究科修了。博士(学術)取得。1993~1997戸田建設建築設計部
勤務などを経て渡米、1998~2001年カナダトロント大学講師を務める。米国マントバ大学、ラトガース大
学での准教授職を経て2014年長崎大学着任。同年より現職。

日本に帰国すべきか
アメリカで暮らすべきか

五島聖子教授ほど、波乱万
丈な人生も珍しいかもしれませ
ん。芸術一家に生まれ、ピアニ
ストを志すも挫折して東京芸大の
美術科に入学。そこで庭園の美
に心奪われ、日本庭園とランドス
ケープをテーマと定めます。小
石川後楽園の思想とドイツの自
然式庭園の思想の共通点を探
るためカナダに渡り、トロント大学
で客員研究員をしている時に
出会った中国系カナダ人の男性と
結婚、そして出産。マントバ大学
で助教の職を得ましたが、その
後パートナーが急逝、当時息子
さんは2歳でした。

「それで私は考えたわけです。
日本に帰って企業に就職して一
人でこの子を育てるか。そのまま
教員としてアメリカで暮らすか。
半分中国人の血が入ってて片
親の子どもとなれば日本の学校
ではいじめられるかもしれない。
それでも私は朝から晩まで働く
しかな。その点アメリカの大学
ならば、結果さえちゃんと出せば
時間の拘束がないし、子連れで
大学に行くこともできる。それで
アメリカで子育てと仕事を両立
させて暮らすことを選択しました」。

学校が退けるとお稽古事も
車で連れていくしかない距離。

その待ち時間にPCを開いて講
義の準備や論文にとりかかると
いう毎日だったそうです。

研究者にとって専門性は軸
そこから広がる人間関係

女性研究者が海外留学を考
えた時、悩みの種が子育てのこ
と。しかし五島先生は、それは取
り越し苦労かも、と喝破します。

「息子が通っていた小学校は
白、黒、茶、黄色と人種も1/4ず
つというミックスでした。自然と
グループに分かれる。ある時息
子が面白いことを言いました。『黄
色い子はテスト第一主義、白い
子はプライドが高くてウソをつく。
茶色の子は体力がある。黒い子
は思いやりがある。僕が転んだ
時、そばで起き上がるのを待つ
てくれるのはいつも黒人の子だ
った』。隣の子が違うのは当然、
でもお互いをリスペクトする環
境で、〇〇人としてじゃなく人間
として育てることができました」。

ご自身にとっても海外での長い
研究生生活は糧になりましたか？

「私たちにとって、研究は生き
方の軸のようなもの。例えば私
の20年来の友人はユダヤ人で
脳神経科のエキスパート。2人
の共通テーマは日本庭園です。
美しいものを見ると医学的には
ドーパミンが出て、心が癒され
る。私はそれをデザインとして追
求したい、彼は医学的に分析し
たい、お互いの感覚がピタッと
合うんです。そこから時間をか
けて信頼が醸成されます」。

専門分野をプライドが持てる
ほど掘り下げた上で、言葉の壁
を乗り越えて感覚が通じる友達
ができる幸せはいかばかりか。
そのためにも、海外を経験する
のは若いときほど良い、とも。

「人生はなりゆき、その場その
場ががんばって最善を尽くすし
かない。プランも大事ですが、プ
ラン通りには行かないのが人生
なんですよ」。



「アメリカのランドスケープ
の専門家はみんな日本庭
園や日本建築にモダニ
ムのインスピレーションを
持っています。でもその歴
史や背景をきちんと説明
できる人がこれまでにい
なかったんですね。そこで私
がその役割を担おうと延
びに勉強しました」。大勢
を引き連れて、京都を案内し
た時の一コマ。

GOTO Seiko



海の上での共同生活は 会話で「共通点」を探し出す



近藤能子 准教授

総合生産科学域
(水産学系)

東京大学大学院農学生命科学研究科水圏生物科学専攻博士課程修了。博士(農学)取得。2008年~11年、米国Department of Biological Sciences, University of Southern Californiaに3年間留学。2015年に長崎大学着任、2018年より現職。

さまざまな海の専門家の パラメータを相互補完

海外=海の外のみならず、海の上での研究生活を経験しているのが近藤能子准教授。水産学部で、海中の化学成分とプランクトンの関係を研究しています。

「水産資源を生み出す一次生産者である植物プランクトンの成長でキープレイヤーになるのが、海洋にわずかにしか含まれていない鉄などの金属元素。しかし、それらが海の中でどのように動いているのか、赤潮形成植物プランクトンを含め一次生産者の種組成や増殖速度にどのような変化を与えるのか、など不明な点が多く、その動態を調べています。国際共同研究調査では調査船には世界中から研究者が乗り込んできます」

逃げ場のない海の上での共同生活、大変でしょうね。

「むしろ陸上よりラクですよ。1分以内で出勤できるし、顔洗って、髪はどうせヘルメットかぶるし(笑)。私の専門は鉄などの微量金属元素ですが、それらの分布だけがわかって、それが何によって決まるのか説明できません。そこで、生物、化学、物理などさまざまな海の専門家が協力して多様なパラメータを測ることで相互補完することが多い

です。よって何らかの形で将来的な共同研究にも繋がるかもしれない。ですので、初対面の方でも余裕がありそうな時に話しかけるようにしています。航海関連の研究用語は異分野でも共通なものも多く、相手も理解してくれようとしてくれます。また、それが日常会話をするにも繋がりますから」。

異文化との接触だらけで メンタルが壊れる暇なし

南カリフォルニア大学にも3年間研究留学していたとか。

「はい、急に渡米が決まったのでまったく準備ができておらず、言葉には苦労しました。ボスがお世話してくれた住まいが男性2人(面識無し)とのシェアハウスで、最初はびっくり!でもこの人達がとても親切で、何でも教えてくれました。夜帰ってきて、疲れてベッドに倒れ込んでます

ぐにテニスやお酒のお誘いが来て1人の時間がほぼ無い。渡米直後からメンタルが参る暇もなかったです。また、日本の漫画には助けられました。海外の方って日本の漫画やアニメが好きな人が多いです。当たり前ですが、仕事自体は丁寧に行いました。実験は慎重に。プレゼンも口頭で伝わらない危惧があれば、大事なポイントを文章にしたスライドを見せて誤解の無いように。不安な時は、メール含めここでも文書で見えるような形に残してフォローしました。私の英語スキル自体は低いと思いますが、一生懸命さは伝わります」。

今後は、どんな展開を?

「長崎近辺の海も、それ以外の海も、どちらも調べたいです。海洋環境の変化が近年問題視されていますが、地道にその予測や解決法につながる研究をさまざまな海域で行いたいですね」。



船に乗った時、必ず最初にするのがこの防災訓練。日本では誰かが着てみせるだけのことが多い救命スーツ訓練も、アメリカの調査船のとある航海では全員が着用。右が近藤先生の、大学院生(中央)と、ともに「イエーイ」と大はしゃぎ。



新たな出会いから 次の研究ステージが見えてくる



No.

Women
Role
Models

細田尚美 准教授

人文社会科学域
(多文化社会学系)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科修了。博士(地域研究)取得。
1984年～86年米国ニューメキシコ州ユナイテッド・ワールド・カレッジ、1991～94年カナ
ダ・オンタリオ州クイーンズ大学大学院、2001年～03年フィリピン・マニラ・フィリピン大学
第三世界研究所と多彩な留学経験を持つ。2019年長崎大学着任。同年より現職。

多様なバックグラウンドを 持つ人という意味

17年間フィリピンで取材したものをまとめた『幸運を探すフィリピンの移民たち——冒険・犠牲・祝福の民族誌』が、第36回大平正芳記念賞と第41回JETROアジア経済研究所の発展途上国研究奨励賞を受賞した細田尚美准教授。

「留学したカナダの大学院で師事した教授から、『どうして日本では性風俗で働くフィリピン女性が多いのか』という疑問を投げかけられたのがきっかけで、フィリピンの移民をテーマにすることになりました。当時私のイメージでは、貧しくて日本にやってきて不本意ながらこういう職業に就いてかわいそう。でも実際にフィリピンで本人たちにインタビューしてみると、『あなた何を聞きたいの？ じゃあそういうバージョンの話をするわよ』と、こちらが手玉に取られて転がされちゃう(笑)。パワフルですよ。私自身が外国で働いた経験もなく、フィリピン人のことを何も知らずに理論だけ当てはめているという反省がありました。そんな時、日本人の方がフィリピンで日本人向けの日報紙を立ち上げ、そこで新聞記者として雇われることに。これはラッキーでしたね。

新聞社を退職後、日本の大学院に入り、フィリピン大学の客員研究員としても席を置きながら、長期の取材活動をしました」。

出会いが次のアクションにつながる、チャンスの前髪は見逃さないタイプですね？

「そうかもしれません(笑)」

高校や大学での留学経験もある細田先生ですが、中学に入学するまではABCもおぼつかなかったというから驚きです。

「りんごはアルファベットでRINGOと書けば通じるとばかり(笑) そのくせ怖いもの知らずで地理が好きだったので、海外に出てみたいなど。ユナイテッド・ワールド・カレッジという世界規模の学校の公募にチャレンジし、運よく入ることができました。世界中にある中で私が行ったのはアメリカのニューメキシコ州のカレッジ。72カ国から同じ年代の学生が集まって寮生活をしました。いろいろなバックグラウンドを持つ

た人達が身近にいる環境に身を置くことの大切さを学び、人生の一つの原点となりました」。

世界規模の学会では少数派だからこそ注目されることも

海外の学会で研究発表をする場面も多い細田先生。

「日本人は海外に行っても発表の準備だけに専念したり、一人で資料を調べたりしがちですが、海外の研究者は新しいネットワークを作ることに注力し、次のステップを見つけようとする人がかなりいます。私のジャンルの文化人類学でも海外で研究発表する日本人は少なく、注目されて声がかかります。『他の会議でも発表してくれ』『一緒にコラボレートしよう』。日本では考えられなかったような枠組みやテーマで研究が発展して自分の研究の幅が広がります。みなさんもどんどんチャレンジしたらいいのではないのでしょうか。」



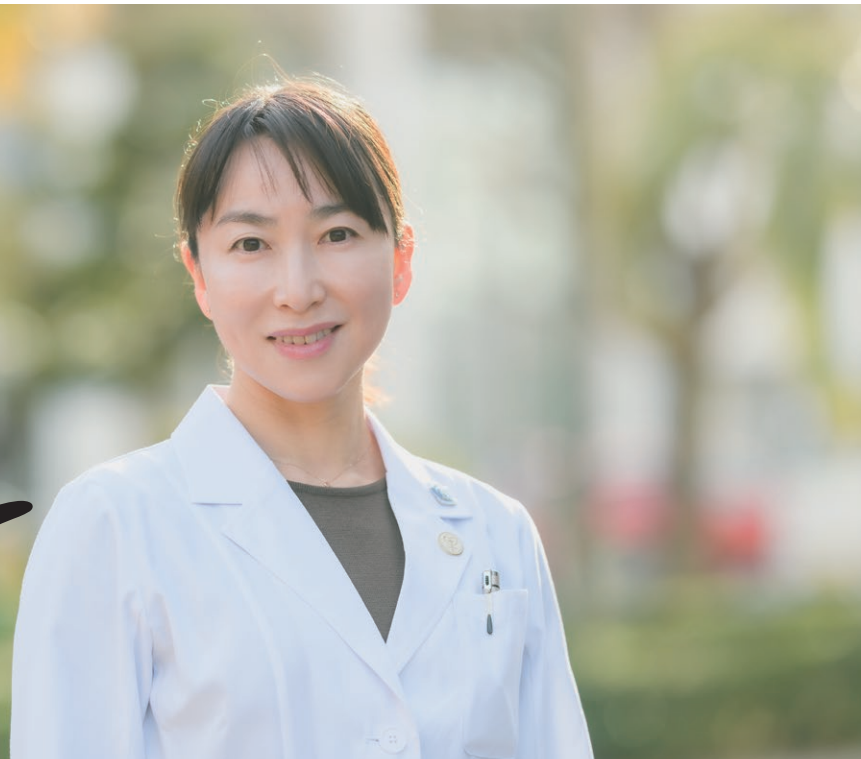
フィリピンでのフィールドワークは郊外の村と、そこから出ていって一旗掲げるために暮らし始めるマニラのスラム街の2カ所をマーク。写真は郊外の島の島民からのヒアリングの様子。



留学しない理由を探すよりも 勇気を出して飛び込んで

No.

Women
Role
Models



山本和子 助教

長崎大学病院
(感染制御教育センター)

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科修了。博士(医学)取得。
2009年～13年米国マサチューセッツ州ボストン大学 呼吸器セン
ターに留学。2015年長崎大学着任。同年より現職。

「君は自分で探さない」 河野教授の一言で奮起

若い研究者を対象に「海外留学のノウハウ」をテーマに講演も行っている山本和子助教は、自身も4年間アメリカ・ボストン大学で研究留学を経験しました。

「いつかは海外で仕事をしてみたいというのが目標でした。専門領域は呼吸器感染症で、細菌性肺炎などの研究を行っており、長崎大学の第二内科に入局当初から留学を希望していました。当時は河野茂教授(現・学長)に師事していたのですが、留学は教授が行先を斡旋してくれるとばかり……。ところが『君は自分で探さない』(笑) 慌てて先輩方に情報収集しました」。

留学先を自分で探すなんてハードル高そうですね。

「感染免疫学を学びたかったので、その分野で世界をリードするラボを探しました。また都市部となると家賃も生活費も高いので給料を出してもらえるように現地で面接を受けました。ペーパーなりに可能な限り自分を大きく見せる履歴書・申請書を作成して、全米3カ所を大陸横断“面接”旅行です。給料の交渉も行いましたよ。そもそも日本人はお金のことは自分からは言わない美德がありますが、仕事に対

する対価としての給与は主張すべきと思います」。

行ってみてどうでした？

「最初の3カ月は辛かったです。センターで日本人は私だけ、プロジェクトも慎重で練習ばかり。発表プレゼンをやっても、主役の頭越しに議論が盛り上がって私一人が置いてけぼりで落ち込んでましたね。ようやく9カ月目に論文になりそうなポジティブデータが出てきて、翌年には現地の研究資金も獲得できました。3年目からは私の技術を学ぶ研究生が国内外から集まって指導したり、ラボの大きなグラントにも貢献できたと思います」。

行けない理由はキリがない チャンスに飛び込む勇気を

先生がボストン留学した2009年～2013年という……。

「その間にボストンテロがあり、日本では東日本大震災がありま

した。テロの時は、犯人のアジトが私の住む地区で怖い思いをしましたね。また、東日本大震災の時はアメリカではショッキングな画像やニュースが多く流れ、私も含めて周囲の日本人も2週間ほど鬱状態の人が多かったです。留学の4年間、心の支えになったものの一つがテニスチームの仲間です。実は大学時代は硬式テニスに入れ込んでいました。仕事や研究だけでは煮詰まるけれど、他に自分の世界を持つというのは大切です。まさに芸は身を助くと実感しました」。

後進の人たちにメッセージを。

「留学に行けない理由を考え始めると身動きがとれなくなります。実際にこのコロナ禍にあっても医局の後輩は2名留学しており、私もお手伝いしました。チャンスがあったらすぐ飛び込む勇気が必要ではないでしょうか」。



ボストンの冬は厳しく-20℃の日もあるとか。「寒さには弱いので、ボストンの冬が越えるかというのが最大の心配事でした。バス停でバスを待つ間、凍え死ぬかと…(笑)でも人間ががんばればなんとかなるものです! 大学医局の先生方から忘れられていないという安心感も心の支えでした。帰る場所があるというのは本当にありがたいです」



研究留学で師事したボスと 共同研究をする関係へ



No.

7

Women
Role
Models

南保明日香 教授

感染症共同研究拠点

北海道大学大学院薬学研究科修了、博士(薬学)取得。2003年～08年米国
ウィスコンシン大学マディソン校に留学。(2003年～06年McArdleがん研究所、
06年～08年獣医学部)。2019年長崎大学に着任。同年より現職。

表現できないもどかしさ
まるで赤ちゃんのような

まもなく完成するBSL-4施設
を利用する職員のための教育
訓練を担当するのが南保明日
香教授です。

「私の専門は基礎ウイルス学
で、対象とするウイルスはエボラ
ウイルスとEpstein-Barrウイル
ス(EBV)です。これらのウイル
スはそれぞれ、ヒトに出血熱や
がんを引き起こしますが、そのメ
カニズムはまだ理解されていな
い点が多く、それらを明らかに
する目的で研究を行っています
。BSL-4施設を安全に稼働させ
るためには利用する研究者の
的確な操作が最も重要です。私
は、人材育成部門も兼務してお
り、教育訓練を通して、将来
感染症でグローバルに活躍す
る次世代の研究者を育てること
が使命です」。

留学経験はアメリカのウィス
コンシン大学マディソン校での5年
間+1年間、というところ。

「2003年～8年の5年間、2つ
の研究室でEBVとエボラウイル
スに関する研究活動を行いました
。帰国後、2016年から1年間
サバティカルで同じ大学へ」。

言語は問題なしでした？

「高校時代から英語が好きで
英会話を続けていましたが、本

場では、私の英語はこんなに通
じないんだ！ と衝撃でしたね。
伝えたいことを自在に表現で
きないもどかしさ、まるで赤ちゃん
になったような(笑)。渡米してから
3カ月目くらいから耳がなじん
で来ました。自信につながったの
は、顕微鏡を使ったイメージング
系を確立するプロジェクトです。
顕微鏡会社の担当者と何度も
やりとりをしながらトラブルを一
つずつ解決して、プロジェクトを成
功に導くことができ、その過程で
ボスとの信頼関係を築くことが
できました。成功したことで他の
ラボからも『ああ、あの仕事をし
た人ね』と認めてもらえるよう
になりました」。

研究志向が共通するボスと
家族同然のおつきあい

「留学時のボス、Billとは足掛
け17年間のおつきあいです。共
同研究も継続していますし、現
在、ある学術雑誌の guest

editorと一緒に務めています。
さらに、『君は家族の一員だよ』
とプライベートでも親しくして
いただいています。Billとは、研究
に対する考え方、興味の対象など
サイエンスにおける共通点あり
ました。ボスの奥様も研究者で、
サイエンスの世界で女性が活
躍することが難しい時代に、脳
科学の学部長を務めた方。そう
いう経緯もあり夫婦共に私を応
援してくれました。女性研究者
の社会進出の話題ではBillの
言葉が印象的でした。『人類の
うち女性は52%を占めているの
に、その割合に見合うだけの活
用は実現できていない。48%の
男性と同等の知的能力を持つ
女性の活用なくして、科学技術
の発展はありえない』。研究者に
とって人脈は大きな財産の1つ
です。今度は後進の方々に私の
持つ人脈を介して、ネットワーク
構築の恩送りをするのが、私の
役割だと考えています」。



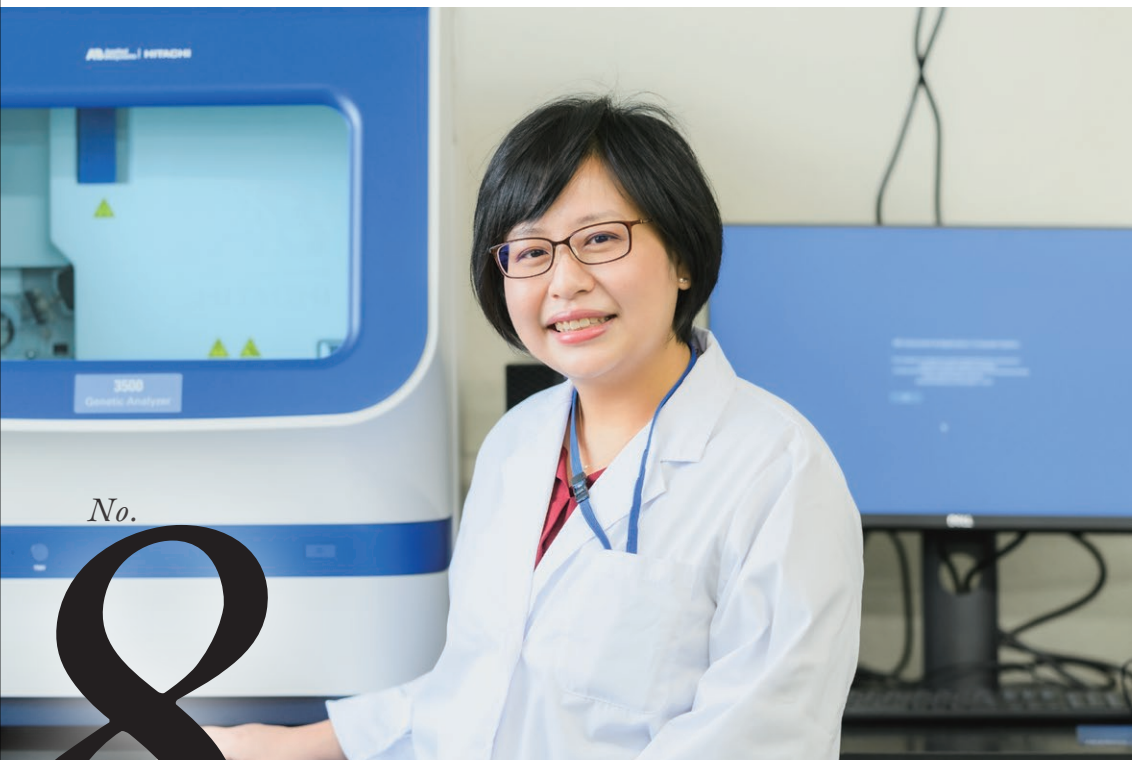
後列左端が南保先生で、
その隣がBill Sugden教
授。「研究室の設備など
な違いはありません。しか
し、横のつながりが密接
です。問題が起きても『○○
先生が良く知っている
から聞いてごらん』と
適切に助言してくれて、
円滑に問題解決できたこと
を何度も経験しました」。

NANBO

Asuka



文化や背景の違う研究者との 共同研究が世界のスタンダード



No.

Women
Role
Models

モイ メン リン 教授

熱帯医学研究所

筑波大学大学院人間総合科学研究科環境医学専攻博士課程修了。博士(医学)取得。2010年～14年、国立感染症研究所・厚生労働技官。長崎大学へは2015年に着任。2020年より現職。2016年～18年にかけて、ベトナム・ホーチミン市とニャチャンにあるバスター研究所等で技術指導。2020年には、内閣府所管の日本医療研究開発機構から、第4回日本医療研究開発大賞理事長賞を外国人で初めて受賞。

今一番求められている コロナワクチンを開発中

マレーシア出身のモイ・メンリン教授は、熱帯医学研究所を拠点に1年の1/3は海外滞在中です。

「今はコロナ禍なので海外出張はありませんが、基本、どこへでも行きますよ。特にベトナムは1年かけて国中の研究機関をまわり、ジカ熱の診断技術を伝えました。この時の技術が新型コロナウイルス感染症の診断にも応用でき嬉しかったですね。信頼関係が築けたので新型コロナウイルスの検体も入手でき、今行っている新型コロナウイルスのワクチンの研究に役立っています」。

長崎大学でもコロナワクチンの研究を行っているんですね。

「はい。世界的に第一世代のワクチンが完成し、それを接種した人の基礎データが蓄積されています。私たちが研究する第2世代、第3世代のワクチンに活

かすことができます。今の時代は大学などの研究機関がシーズを研究して製薬会社などが発展させます。製薬会社には基礎研究の施設がなく、ワクチン開発はBSLという、基礎研究のできる施設がないと何も進みません。長崎大学が設置を進めている国内のBSL-4施設は、日本のワクチン開発においても、非常に重要な施設なのです」。

来日して17年経つモイ先生から見て、日本と世界の研究体質の違いは何でしょう。

「日本の場合、いいものを作り出すというこだわりが強いんですね。世の中に出す以上100点満点に近いものを。だから信頼性が高く、私自身学ぶべき点が多いのです。海外ではまず結果を出し、その内容がどうあれ早く発信しようとします。それに横の連携が取れているのが強みでしょう。例えばアメリカのファイザーはドイツのベンチャー企業と組み、イギリス

のアストラゼネカはオックスフォード大学と組んでいます。世界規模で良いところを組み合わせで開発しようという連携が取れている。日本も情報共有をしながら開発していく基盤の強化が必要です。そうすれば1+1が3や4、5になる可能性があります」。

マレーシアの家庭にみる グローバルのかたち

モイ先生は母語のマレー語のほかに、英語、日本語、インドネシア語、北京語、広東語と6種類の言語に通じるそうですね。

「マレーシアは、マレー人、中国人、インド人等からなる多民族国家です。子どもの頃から、家庭内でいろいろな言語が飛び交います。研究の世界も同じで、国籍や文化が違う研究者との共同作業が当たり前の時代です。そのような環境に溶け込むには、チャンスがあれば若いうちに海外に出た方が良いでしょう。共同研究、開発は、相手の文化や背景を理解して行うことが成功のコツだと思っています。私は共同研究者の国を訪れたら、その国の歴史や文化を学ぶために博物館に足を運ぶこともありますよ」。

相手をリスペクトして得意分野で協力し合うことが、研究者の新しいスタンダード。海外での経験はそのための最初の一步となるという言葉が印象的でした。



2016年、WHO西太平洋地域事務局の専門家やベトナム国立衛生疫学研究所と協力し、ベトナム・ハノイでジカ熱の実験室診断の技術指導をする様子。翌年にはベトナムの主要な衛生疫学研究所で診断技術のサポートを継続したそうです。「一連の活動において、アジアで初めてジカ熱小頭症例が発見され、ジカ熱対策の重要性が再確認されました」。



エネルギーをもらえるけれど こちらにもエネルギーがいるニューヨーク

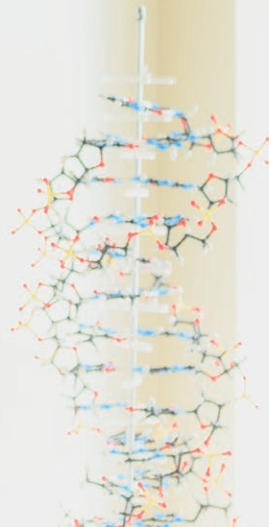
No.

Women
Role
Models

山吉麻子 教授

生命医科学域
(薬学系)

京都工芸繊維大学・大学院工芸科学研究科・機能科学専攻・博士後期課程修了。
博士(学術)取得。2012年13年米国Memorial Sloan-Kettering Cancer Center
留学。2018年長崎大学着任。同年より現職。



世界最古のがんセンターで 構造解析を学ぶ

「DNAが世界で一番美しい分子だと思っています。写真を撮るなら愛するDNAの模型と」という山吉麻子先生。専門は創薬ですね。

「副作用のない薬を創ることがライフワークです。遺伝子の病気を遺伝子で治す核酸医薬という世界です。副作用のない薬というのはターゲットの構造がわからないとデザインのしようがありません。そこで、構造解析を学びたくてアメリカのメモリアル・スローン・ケタリングがんセンターに11ヵ月研究留学しました」。

センターはニューヨークのど真ん中。すると住まいは？

「マンハッタンから近いルーズベルト島にセンターが借り上げたアパートメントがあり、そこに住むことができました。ロープウェイで空中散歩を楽しみながらの通勤です。近くにロックフェラー大学やコーネル大学があって、スローンとこの2つ大学は共通IDを持つことができ、いろいろなセミナーにも参加できました。ニューヨークって、街そのものは一見汚いんだけど(笑) 世界中から『何かやってやろう』という人たちが集まってきます。コンサートも講演もお店もね。エネ

ギーをもらえるけれど、そこで暮らすのはこちらにもエネルギーがいります」。

楽しくて孤独な日々を経て 家族の大切さを知る

センターでの日々とは？

「構造解析のラボメンバーは多国籍で、毎日がんがん実験していましたが、金曜日になるとハッピーアワーで無料でビールやワインが飲めました。オンとオフがしっかり分かれていましたね。ハロウィンの時はみんな仮装して、私が何もやっていないと『耳だけでもしろ』と猫の耳を貸してくれたり。私と同時に入ったイタリア人でジュゼッペ君というボスドクがいたんですが、同じ空港で同じようにロストバゲージに遭い、アパートも同じだったのですっかり仲良くなりました」。

うわー楽しそう、まるで少女コミックの世界です。

「うーん、でも差別や意地悪も

されましたよ。研究室では器具の洗浄や滅菌処理など専門スタッフが行うのですが、私たち黄色人種の使ったものは無視されて帰っちゃう。しょうがないので知っていそうな人に声かけて洗浄機の使い方を教わって自分でやったりしました。結局、ニューヨークは楽しいんだけど、反面めっちゃくちゃ孤独。日本で人に囲まれて育った幸せや家族の大事さをすごく感じました。だからでしょうね、帰国してから結婚を決めました。一緒に歩む人がいるって強いことだなと、今は思いますよ」。

おお！そういう展開ですか(笑) パートナーの方は専業主夫と聞きました。

「はい、The晩婚、The高齢出産を経て、夫と息子と3人、私なりのワークライフバランスを構築しています。もし今後、海外に行くチャンスが会ったら、家族ともども行けたらいいですね」。



英語は今でも苦手という山吉先生。「高校の頃は受験のためにやらされていたという感じがしたが、海外経験を経て世界中の人と話すことでモチベーションも上がると考えています」。今もNHKの英会話番組を日課にしているとか。

外に出ることによって得られるものとは？

お集まりいただいた5人の研究者に、大学の研究者と海外留学について、ざくばらんに語っていただきました。



門脇知子 × 角 美佐 ×

KADOWAKI Tomoko

SUMI Misa

中島ゆり × 賽漢卓娜 × 榎 景子

NAKAJIMA Yuri

Saihanjuna

ENOKI Keiko

海外へいくにも さまざまな形がある

——まず、自己紹介を兼ねてみなさんのご専門について教えてください。

門脇／私の所属は歯学部で、歯周病やアレルギーを起こす要因と、それを制御する方法を探る基礎研究を行っています。

中島／専門は教育社会学で、大学教育イノベーションセンターに所属しています。地方の若者のキャリアと地域移動をテーマに研究しています。

榎／私は教育学部です。専門は教育制度論や教育行政学で、教育改革と地域づくりの運動についてアメリカを事例に研究しています。

ジュナ／専門は家族社会学と移民研究で、多文化社会学部に所属しています。国境をまたいで移動する人々の家族生活のあり方や就労について研究しています。

角／私は、歯学部の臨床系講座の所属で、頭頸部領域の画像診断に関する研究・教育と、大学病院の歯科にいられた患者さんのCTやMRI、超音波などの画像検査とその診断を

行っています。

——みなさん海外留学の経験がおりなんですか？

角／私はこれまで機会がありませんでした。ですから今日はみなさんのお話をお聞きするのが楽しみです。

榎／私も留学というよりは、10日間前後の短期調査を年に1～2回。それを修士の時から8年近く継続しています。気になる改革をしている都市へ行き、関係者に話を聞いたり、地域を歩いて回ったりします。例えばカリフォルニア4回、

シカゴ3回、次はニューヨークといった具合です。研究対象の一つとして扱っている学校統廃合は、日本だと子どもの数の減少が要因ですが、アメリカでは学力テストの成績低迷を理由に実施されたりします。つまり学力政策の一環として進められるんですが、現地で話を聞き、統廃合が進む地域の住宅政策や経済政策まで調べると別のことが見えてきます。シカゴでは学校統廃合と都市再開発を秘密裏に連動させることで、他都市から富裕層を誘引し、現住民の貧困層が住めなくなるという「ジェントリフケー

ション」と呼ばれる現象が起きていました。このメカニズムと子どもへの影響を、住民や学校の先生、NPOの方にヒアリングして調べています。

門脇／調査に協力してくれる現地の方がいらっしゃるんですか？

榎／論文やネットで探して自分で開拓しています。とにかくメールを送りまくる。数撃ちや当たる方式です(笑)。でもアメリカの方って不思議で、1度会うと親身になってくれる。そのあたりは中島先生の方がお詳しいかと。ある人に来て話を聞く中で「実はこの人にも会いたいんだけどメールに返事が来なくて」というと、その場で電話して取り次いでくれたり。現地では調査できる時間が限られているので、行く以上は何か得るぞ!と泥臭く積極的になる面も。

——中島先生もアメリカに行かれたんですね。

中島／はい、私は日本で博士課程に5年所属したあと、アメリカの大学院に入り直し、2年ほどでコースワークを終えたあと日本に戻って大学で働きながらアメリカと行ったり来たりで結局7年間ほど所属。最終的にはあちらで教育社会

図書館にずらーっと並ぶ
専門書の多さに、学びの
広さを実感しました



中島ゆり 准教授

大学教育イノベーションセンター
神奈川県出身。ニューヨーク州立大学バッファロー校教育学研究科博士課程修了(Ph.D.)。2015年長崎大学に着任、同年より現職。専門は教育社会学。研究テーマは地方の若者のキャリアと地域移動。

学系の博士号を取りました。

全員／すごい！

中島／アメリカのバッファローでナイアガラ滝のあるところ。きっかけは、このニューヨーク州立大学バッファロー校の先生が知り合いを通して、『留学したい人がいれば引き受けますよ』と。それで、私も人生で1回くらいは留学したいな、という安易な気持ちで(笑)。でも大学のアシスタントシップがとれて学費も保険料もすべて払ってもらえた上、生活費と家賃をまかなえるくらい給料がもらえることになったので、アメリカで学位を取ることにしました。ちなみに留学時は30歳でした。そもそも英語は得意ではなかったのですが勉強する環境としては申し分なく、読み書きはできるようになりました。

榎／私も英語は苦手で、それで留学する勇気がでませんでした。すごくハードルが高い気がします。

中島／私、学部は英語ができるというイメージの大学卒なんです。だからこそ逆に帰国子女以外の人の英語コンプレックスがすごくて、私も留学前は国際学会で発表する時は用意したものをひたすら読む、まあ、英語ができないわけです。ところが留学では鍛えられました。なにしろ、噂通り「来週までにこの本1冊読んできて」(笑)

門脇／宿題多いですね。超大変！

ジュナ／ハーバードの大学の図書館は夜中の3時4時まで灯りが点いて、学生たちが勉強に励んでいることは有名ですね。

中島／そういう環境が普通ですね。ただ、日本にいと英語をしゃべる機会が少なくなるので今では週1回英会話に通っています。

門脇／私もアメリカで、ペンシルバニア州のハーシーというところ。ハーシーといえばチョコレート。創業者のミルトン・ハーシー氏が寄付してできたメディカルセンターがペンシルバニア州立

大学の中に組み込まれています。だから「コアアベニュー」と名付けられた道があったり、風向きによって工場からチョコの匂いがする、のどかな街です。

全員／素敵ですね。

門脇／実は私が留学できたのは日本学術振興会の特別研究員だったからなんです。この学術振興会のプログラムは3年間のうち半分まで海外で研究費を使えるんです。ちょうどそのころ結婚して、うちの主人がそこに留学することになり、いっそ私も行ってみようかと。

——珍しいケースですね。

門脇／そのボスは同じ研究ジャンルの方ですごくバイタリティーのある女性。病気のお子さんを抱えながら仕事をし、学部長もこなす方でした。私は留学前にマンツーマンで英会話の勉強をして「私けっこう通じるかも」と思って渡米したら、まったくついていけない！速度が全然違い、ラボでの議論も苦労しました。するとボスが「私が日本語で読み書きして論文書けと言われてたら絶対できない。日本語も使いながら英語で頑張っているあなたたちの方がすごいよ」と言ってくれて、ずいぶん気が楽になりました。ボスが言うには、カタカナ英語で流暢でなくても、パッションのある人の話はよく伝わると。

——ご夫婦で行かれたのなら、現地でストレスがたまって精神的に救われたのでは？

門脇／一応ラボでは日本語禁止なので「おばちゃん(ボス)に怒られた～」なんて愚痴だけ小声で(笑)でも確かに、日本人の中にはメンタルが危うい方もいましたね。日本人同士のコミュニティで「心配だからちょっとみんなで集まろう」と料理を持ち寄って、たまったストレスを日本語で語り合ったらすっきりします。その彼は、最初は炊事もできなかったのに、最後はケーキを焼



門脇知子 教授

生命医科学域(歯学系)
福岡県出身。九州大学大学院歯学研究院修了。2009年長崎大学着任。2014年より現職。免疫応答をテーマとし歯周病細菌が全身に及ぼす影響などについて研究。

いて持参するまでに(笑)

日常会話と専門の学び どちらが言葉が通じるか

——ジュナ先生は中国の方ですから、今まさに海外経験。でも来日してかなり長いとか。

ジュナ／考えてみると自分の人生の半分は日本ですよ。私は20代前半まで北京で公務員でした。北京市政府の民族政策により国内少数民族の権益保護を目的とする部署で働いていました。少数民族に関する民族学や人類学についてもっと勉強してみたい、それと、一度は海外へ、という気持ちが湧いて日本にきました。

門脇／どうして日本に？

ジュナ／父が日本の大学で招聘教授をしている間に遊びに来たんです。実は両親には内緒で留学計画を自分で立てて、来日してから大反対の両親を説得しました。当時は身元保証人が必要で、父の友人が引き受けてくださり、その方のご縁で愛知県に行きました。

中島／日本語は日本に来てから学んだんですか？

ジュナ／はい、まさに「あいうえお」から。でも日

日本での研究調査では
なるべく控え目、謙虚
を心掛けました



賽漢卓娜 准教授

人文社会科学域(多文化社会学系)
中国北京市生まれ北京育ちのモンゴル人。名古屋大学大学院
教育発達科学研究科修士、博士(教育学)取得。2014年長崎大
学に着任、同年より現職。専門は家族社会学、移民研究。

本語を学ぶのはすごく楽しかったですね。例えば、今日習った単語は今日のうちに3回使うと自分で決めて、大学の先生、職員や地域の人をつかまえて話すのです。相手の表情を見ながら「あ、これはいけた(笑) おっと今の使い方はおかしかったみたいだ(笑) ところが本当に専門に入ると日本語が難しい! 「社会学史」の講義はついていけなくて、ノートを借りて写しながらようやく理解する日々が1、2年続きました。大量に本を読んだり、レポートと論文を繰り返すことでやっと身に着けました。

中島/私は、むしろアカデミックの話はわかるけれど、テレビや日常的な会話がさっぱりわからず、みんなと笑えませんでした。

ジュナ/日本人は英語の読み書きが強いと有名ですね。私の場合は、日本でフィールドワークをするため、いろいろな年齢層の方と話しました。何しろ、私の初フィールドは愛知県でも東三河弁が強い地域(笑) さきほど、パッションとか積極的という話がありましたが、逆に私は研究調査ではなるべく控え目に、謙虚にすることを心掛けました。特に農村地域は保守的でコ

ミュニティに入りにくいのです。そこで私は国際結婚で中国から来日した花嫁さんとその家族を対象に調査しました。以来、移民と家族が私のテーマとなっています。

—角先生は留学経験がないとのことですが、医療関係の研究者は留学する機会は少ないのでしょうか。

角/歯学部では、博士課程を修了する前に留学するという話はあまり聞きません。

門脇/医歯薬では、博士課程を修了して行く場合が多いですね。言葉ができなくても、技術があれば一目おかれるような……。

角/皆さんのお話をお聞きして、素直にうらやましく、今からでも行きたいですが、私たちのような臨床系講座の場合、研究や教育以外に、毎日夕方まで診療業務があるので、医局の誰かが休暇をとると、その分の診療業務を他の医局員が負担することになります。留学する場合も、他の医局員への負担を増やすことが前提になるので、自らの希望だけで留学するのは難しいのが現状ですが、それをなんとかやりくりしてで



角 美佐 教授

生命医科学域(歯学系)
福岡県出身。九州大学大学院・歯学研究科修士。
1996年長崎大学着任。2020年より現職。専門は
頭頸部領域の画像診断。

後輩には可能な限り
「行っておいでよ」と
言っておきたいですね

も、今となっては、自分よりまず後輩に、海外をぜひ経験してほしいと思います。

—長崎大学は近年、研究者の海外経験を重視するようになったと聞きました。

門脇/ダイバーシティ推進センターでも女性研究者を海外に出すことを促進していますね。

中島/経済的な支援があれば留学も、調査も行きやすいと思います。長期・中期・短期というるな支援があるようです。

角/いい機会だから、後輩には「行っておいでよ」と言っておきたい。みなさん留学先で最初は苦労しながらも、それを乗り越えて成長して、自分の糧になっていると感じます。

門脇/私は「海外に行ったからすごい」というのは違う気もします。行ってみたら世界は意外に小さくどこも同じ、と。

中島/そう、外国に行ったくらいでは「箔」はつけない(笑) すごくもともとないですよ。言葉が違っても国が違っても仕事はできると、外にでて逆に実感しました。

角/逆に、その世界の小ささを体感しているというのが、留学した先生達の強み。よけいな恐れがなくなって、いろいろな経験を乗り越えたことで自信がついて視野が広がっていると思います。

中島/確かに自信はつきました。現地の大学の図書館で、英語で書かれたあるジャンルの専門書がずらりと壁一面に並んでいるのを見ると学問の広さも実感できます。また、私は30歳で留学しましたが、あちらでは学校の校長先生や

会ったばかりの私に現地の
方が親身になってくれて、
優しさが沁みましました



榎 景子 准教授

人文社会科学域(教育学系)
熊本県出身。神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程
修了。博士(教育学)。2019年長崎大学着任、同年より現職。専門
は教育制度論、教育行政学。研究テーマは教育改革と地域づくり。

大学職員さんが博士号を取りに通うなど、年齢もさまざま。自分の年齢もどうでもよくなります。

ジュナ/日本にいと「何歳なの?」とすぐ聞かれたり、一浪か二浪かが気になったり、レールから外れたら大変という一律化された世界。でも一度海外に出ると、社会で生きる強さを得られます。

中島/学び始めるのは何歳からでも遅くないです。

ジュナ/そういう人が多様な視点を提示してくれます。教室に同じような経験をした同じ年齢の人しかないと、議論が活性化しません。多様な人たちの中に混ざるのはいいい刺激になります。もう少しレールを外れてもいいかもね、と。

中島/そう、生きるのが楽になりますよ。

—それは海外留学の効能のひとつですね。今日はみなさん、ありがとうございました。

多様な人々の中にいると
違う世界が見えてくる